

子どもの力を伸ばす 療育の場所の必要性

山内 康彦

『特別支援』という言葉に対して抵抗がある人は現在も多いと思います。文科省は、通常の学級にも二、三人程度、特別な支援が必要な子ども達がいると発表していません。特別な支援は、もう特別なものでなくなくなっています。問題点があります。そのような背景の中、次の問題点があります。

▲▲▲
▲ 特別の支援に関わる専門的な教員の不足
▲ 教員の異動や幼保、小中高間の引き継ぎ不足
▲ 教員や保護者の多忙による必要な支援の不足

これらの問題に対しては、行政も園も学校も全力で取り組んでいきます。しかし、よりお子さんのことを考えるのであれば、「児童発達支援事業所」や「放課後等デイサービス」の活用は大きな意味があると考えます。その理由としては、次の点が考えられます。

① 単なる預かりではなく、個の発達や課題に応じた細かな支援ができる環境が整っている。

② 長期的な預かりができることを通して、支援の基地的機能を果たし、有効で効果的だった支援の学校や教師、保護者に発信し、総合的な支援が可能となる。

③ 長く同じ担当職員と関わる中で、長期的な見通しをもった教育相談・進路指導ができる。

④ 保護者の皆様自身のゆとりが生まれ、お子さんを肯定的に見ることができるようになる。お子さんを肯定的に見ることがあるお子さんは、幼少期のうちから「僕にもできたよ」「私の自慢は○○だよ」といった自己肯定感をもたせるように育てていくことが大切です。現在多くの療育施設があります。が、利便性で選ぶのではなく、お子さんの可能性を伸ばす質の高い場所を選択することが重要です。また、『スカラ』のように学習支援も充実した施設は大変貴重であると考えます。